

ジェンダー史研究

— 第二次世界大戦後の「野球」と日本人男性の「男性性」—

A Study of Gender History

— Baseball and the Masculinity of Japanese Men after World War II—

山口=内田 雅克 | YAMAGUCHI=UCHIDA Masakatsu

Was baseball, as one thought, just the symbol of peace, hope, and democracy?

Immediately after the end of World War II, men who had enjoyed baseball before it became prohibited because of the war steadily began to promote the revival of the game under the occupation of the Allied Forces. Among the men promoting baseball were the leading men in amateur and professional baseball, and the men in General Headquarters (GHQ), including a Japanese American. In the process of the revival, which was supported by such media as baseball magazines and the education policy of the Ministry of Education and GHQ, ideologues such as TOBITA Suishu, praised the beauty and pureness of young baseball players, and expressed the expectation that the reestablishment of the Japanese nation could be entrusted to such boys. Some were seeking the realization of a friendly baseball game to try to establish an equal relationship between Japan and America. A Japanese American in GHQ, Cappy Harada, feeling the pride of the Japanese, was deeply moved by the sight of the Rising Sun flag flying in the stadium.

The author finds the common core among them, that is, “They commit the task of restoring the masculinity of Japanese men to baseball.”

Keywords:

ジェンダー史、男性性、野球

gender history, masculinity, baseball

はじめに

『瀬戸内少年野球団』¹では、野球というスポーツは長い戦争という暗闇に終焉を告げる一筋の光として描かれた。それは多くの人々に共有された思いであったろう。平和、希望、そして民主主義を象徴したと言われた「野球」。だが、はたして「野球」はそれだけであったのだろうか。本稿はジェンダー「男性性」の視点から、第二次世界大戦後の「野球」を問い直すものである。

「男性性」を構築されたものという視点から括弧で括り、また「男らしさ」とも区別する。「男らしさ」も構築物として見るが、そこには「逞しさ」「強さ」「潔さ」「指導性」「冷静さ」といった作られたプラスのイメージが強い。「男性性」はそうしたプラスの側面だけではなく、拙著において論じた「ウィークネス・フォビア」—「弱」に対する嫌悪と「弱」と判定されてはならないという強迫観念—といった負の側面をも含むものとして用いる²。

関連分野の先行研究として、野球と「男らしさ」への言及は、40年余にわたり日本野球の精神を論じた飛田穂州に関する研究に見られる³。飛田は1886(明治19)年生まれで、学生野球選手から指導者となり、戦前は「戦時学徒体育訓練実施要綱」の野球禁止に反対し、戦後は1946年に日本学生野球協会を創設した人物である。先行研究では、飛田の論説の核にある、勝利至上主義的信条、武士道野球、精神の鍛錬・修養・道徳、練習、仇討主義、質素剛健などとともに、飛田が求めた「男らしさ」が指摘されているが、ジェンダーの視点からそれを議論の俎上に載せてはいない。

またスポーツとジェンダー、とくに「男性性」というテーマでは、スポーツの男性主体と女性従属という、社会の性役割

を確認・再生産する装置としての機能、また近代産業社会の原理の反映、さらに「体育会系男子学生の性暴力」などが論じられている⁴。しかし、可変的現象としての「男らしさ」を歴史的文脈のなかに読むものではない。

この視点を有する先行研究には、千葉慶、酒井晃の論がある。前者は「日米安保体制と裕次郎映画」において、石原裕次郎主演の映画を通して去勢神話と男性化への欲望というナショナル・アレゴリーの悪循環を指摘している¹。後者は1950～53年までの「文化人の性科学誌」を標榜した『人間探求』に「男性性」の再構築を論証したものである²。千葉は検証の場をスクリーンのなかに、酒井は着眼点をセクシュアリティに、それぞれ限定したものである。筆者は時代を第二次世界大戦後に設定し、野球復活に奔走した男たちの動き、飛田穂州の言説、野球雑誌や少年雑誌などのメディア、GHQや文部省の政策、さらにはGHQ内の日系アメリカ人の心理を視野に入れ、戦後の野球に日本人男性が求めた「日本男児の男らしさ」の復権を巡る様相を読み解きたいと考える。

本論に入る前に、戦前の野球を概観しておきたい。野球は1872(明治5)年頃に日本に伝わり、大学生・旧制高校生たちの間で広まった。明治20年代に学生野球をリードした一高は校風と野球を「男らしさ」で結び、勝利至上主義やナショナリズムといった性質をも帯びていたことが、近現代スポーツを歴史社会学から分析した菊幸一によってあきらかにされている³。アメリカ人ジャーナリストのロバート・ホワイトティングがアメリカの野球との異質性から『菊とバット』で「サムライ野球」と名づけた日本独特の野球は、すでにこのときに萌芽を見せている⁴。1910・1911(明治43・44)年頃には、武道に劣る外来の遊戯として野球撲滅論が起こりながらも、1915(大正4)年には、大阪朝日新聞による中等学校全国優勝野球大会が、さらに1925(大正14)年には東京六大学リーグ戦が始まり、学生野球は熱狂的なファンを生み出していた。1936(昭和11)年には職業野球も生まれ、人気スポーツとしての定着を見ていたが、戦局の悪化によりその姿を消していった⁵。

1. 男たちが動き始めた1945年

1945年8月、焼野原に食住を失った人々が溢れるなか、野球復活を唱える男たちが敗戦の翌日に動き始める。早稲田大学野球部出身、後に高校野球連盟会長を務めた佐伯達夫は朝日新聞社を訪問し、中等学校野球大会(現在の全国高校野球選手権大会)の再開を要請する。佐伯の少年時代は偉大なる軍人のそれと同じく、ひ弱な少年から「やんちゃ坊主」になったという「定石」である⁶。佐伯は野球を通して「男らしさ」を獲得し、挨拶以外に暑さ寒さを口に出さない男になったと自身が述べている⁵。「硬式野球は男がやるもの」という信念を崩さなかった彼が、青少年に必要と感じたのは、決して娯楽ではないだろう。彼は「青少年を真っ直ぐに引っ張っていくのが急務」と述べている⁶。野球と「男らしさ」の図式と、「健全な身体に健全な精神は宿る」というモットーを併せ、佐伯は青少年の教育に関わろうとした。

さらに1945年8月下旬には、アメリカと野球に通じた貿易商社員である鈴木惣太郎が、公職追放前でまだ読売新聞社社長であった正力松太郎を訪ね「プロ野球再建」を提案する。鈴木惣太郎は昭和初期の頃からアメリカ大リーグの訪日を切望し、「日本人が工夫研究して大成した野球とアメリカ人のベースボールと、国際スポーツとしてはなばなく競技してみたい」と期待を語っていた⁷。戦争によって中断されたプロ野球の復活は、彼自身が自分の居場所を再度獲得するだけではなく、予てから願っていた野球での対決を実現するなかに、アメリカとの「対等」を実現しようとしたのではない。

このとき学生野球再建に動き出していたのが、松本瀧蔵である。松本は幼少期に母とアメリカカリフォルニアに渡っている。22歳で帰国後は全国中等学校優勝野球大会にも出場し、明治大学では野球部マネージャーを務めた。大学教授を歴任し、1946年に衆議院議員となりGHQとの交渉にもあたった。自ら甲子園の土を踏み、六大学の野球部にも所属していた松本に、一高や飛田の野球精神が流れていたであろうことは想像に難くない。

1945年10月、松本と鈴木惣太郎はGHQスペシャル・サービス部総責任者ウィルソンに対し、球場接収解除を求める。やがて彼らを吸引していく正力は、1945年の第一次読売争議、12月のA級戦犯指定、1946年の公職追放という動乱のなかにあった⁸。

そして早くも1945年10月28日には、東京六大学OB戦が開かれている。また学徒出陣壮行早慶戦時に、早稲田大学野球部マネージャーであった相田暢一は、早慶戦の復活に日本の希望の灯を見出そうとする。「戦争中野球は弾圧されて、リーグはついに解散を余儀なくされた。それが今再び力強く、復活の躍動を始めている」と⁹⁾。「力強く、復活の躍動」が払拭したいのは、敗者である惨めな男性像である。

このころ、やはりプロ野球再建に奔走したのが鈴木龍二である。国民新聞の記者からプロ野球団東京軍の球団常務に就任し、その後大日本野球連盟の理事長、戦後も日本野球連盟会長に就いている。外務省に松本瀧蔵(当時外務政務次官)を訪ね、「日本占領はアメリカが主力になる。国民生活がどうなるかというとき、アメリカとうまくやってゆく、外交関係をスムーズにやるためには野球が一番いい。われわれはプロ野球を復活して日米親善の架け橋となって、大いに貢献するつもりだ」と、占領者との親善を野球というスポーツを通して実現しようとする¹⁰⁾。野球場での対戦となれば、少なくともそこには「対等」が確保される。

1945年の11月6日には日本野球連盟復活宣言、18日にはオール早慶戦、23日にはプロ野球東西対抗戦野球と、次々と復活は具体化されていった。占領下、この復活を後押ししたのはGHQであった。スクリーン・セックス・スポーツという3S政策があり¹¹⁾、そして自身が陸軍士官学校時代にはベースボールに興じていたマッカーサーはアメリカ生まれのスポーツを民主化の象徴とした¹²⁾。チーム全員が協力し、精神主義ではなく、技術や駆け引きによって勝利を得るというプラグマティックな思考への教育が野球を通してなされるとされた¹³⁾。こうして野球と民主主義を結びつける言説が登場する。そしてGHQは敗戦後の民主安定政策として、プロを含めた野球を奨励し、接収下にあった後楽園をはじめとする野球場を開放し、ラジオ中継も許可する。

注目すべきは、日本野球連盟復活宣言当日に朝日新聞に掲載された飛田穂洲の投書「日本野球道の再建」である⁷⁾。戦前からの「武士道野球」から武士道用語を削除しながらも、精神主義的人間鍛錬、集団主義といった「日本野球」なるものを主張する。「異口同音に強調された日本精神は果して付焼刃でなかつたと誰がいひされるだらうか」と切り出し、「再出発に当つては一層この点に留意して健全無比の野球を組み立ていかなばならぬであらう。野球経世の大理想を実現せん為に!」と締めくくっている。飛田が野

球を始めた動機は、水戸中学時代に対戦相手に負け、その「復讐」であったと述べている¹⁴⁾。また早大野球部コーチ就任に際しても、シカゴ大学野球部への「復讐の一念」を動機として語っている¹⁵⁾。復讐・勝負への強い執着を見せる彼のなかでは、野球と平和は結びついていない。占領下という屈辱のなかで、惨めな敗者である日本人男性の再生のために、彼が野球にかける悲痛な思いを読み取れないだろうか。千葉が前掲論文で用いた表現を借りるならば、敗戦国日本のいわば「去勢された男たち」にとって、「男らしさ」再定義の格好の拠り所となる説を飛田は提供したのである¹⁶⁾。飛田は戦前に、「男は男らしく」「男は軟弱ではいけない」と軟弱学生を嫌悪し、「女はあくまでも女らしいしとかかさが必要」と説き、「らしさ」の欠如によって「日本国家の危険が招来される」と語っていた¹⁷⁾。そして戦場と野球場、チームメイトと戦友を重ねた論を展開していた¹⁸⁾。歴史学の有山輝雄は、「武士道野球」が戦前期日本の社会において「正しく模範的な」日本人のモデルを示していたことを指摘している¹⁹⁾。飛田が『少年倶楽部』に寄せた記事「優勝以上」(1937年9月24巻11号)では、野球少年はこの上なく「男らしく」描かれ、少年兵を彷彿させるものであった⁸⁾。

その飛田に再び出番が用意されたのだ。彼は戦時期の軍人の消失によって生じた戦後の「男らしさ」の空白を、戦場の軍人と同一視された球場の野球選手によって埋めたのである。飛田は朝日新聞社・大日本学徒体育振興会共同主催の「スポーツ巡回学校」に参加し、スポーツの復活・振興のために尽力していく。

そして1946年4月にはプロ野球公式戦、5月には東京六大学野球、全国の大学野球リーグ、8月には都市対抗野球も復活を遂げていた。

2. 教育・メディアと野球

次に、こうした男たちの動きに呼応するように、メディアや教育政策がいかに野球というスポーツを推進していったのかを見ていこう。

1945年9月、文部省「新日本建設の教育方針」の「体育」は、明朗な運動競技を奨励し、純正なスポーツを復活することを謳った。さらに同年11月、文部省により武道禁止の通達が出されている⁹⁾。

GHQは日本の教育の基本政策として日本の軍国主義的、超国家主義的教育を一掃するために、1946年1月、専門家による教育使節団の派遣を本国に要請した。教育刷新委員会、文部省、連合国軍司令部の三者の間で、使節団報告書の勧告の軌道の上に、教育改革が具体化された。同年3月の第一次報告書には、以下のように書かれている。

体育

身体を丈夫にし、体調を整え、身体的技術を教えることに加えて、学校はスポーツマン精神および共同作業に固有の諸価値を認識する必要がある。家庭や路地でもでき、身体への調整的価値をもつスポーツやゲームを盛んにするよう、あらゆる努力がなされるべきである²⁰⁾。

1947年『学校体育指導要綱』の「二、体育の目標」には、「勝敗に対する正しい態度、レクリエーションとしてのスポーツの正しい認識」「適切な判断と敢行力」「礼儀」「誠実」「正義感—フェアプレー」「克己と自制」「法及び正しい権威に対する服従」「情況に応じてよい指導者となり、よい協力者となる能力」と、野球というスポーツに実現可能性を見いだせる多くの項目が並ぶ。同書「三、発育発達の特質と教材」(三)中学校「約13年—15年」の男子の「精神的特徴」には、「団体に属しようとする欲求が強い」「闘争、競争、自己誇示の傾向が強くなる」「冒険的野心的となる」などの項目があり、これらも野球というスポーツでの発現が期待されてくる¹⁰⁾。このように国家の教育方針に合致した野球は、男子にとって格好のスポーツとなり、教育の場でも認められ、そして学校外でも少年に浸透していく。「新しい小学校の体育」では「ところがスポーツを行えば自然と民主主義になることができる」と書かれる¹¹⁾。体育・スポーツにおける戦後改革の研究を進めた草深直臣は、等号で結ばれたスポーツと民主主義の概念が新学制期の理念を形成した事実を指摘する²¹⁾。

やがて1951年の学習指導要領には、「フットベースボール」「ハンドベースボール」「ロングベースボール」、「ベースボール」「ソフトボール」と並ぶ。女子の排除・男子の序列化など、さまざまな問題性を有した野球は、学校教育を通してその問題性を問われることから免罪されてしまう。特権的な地位である「体育」という教育が内在する問題性を暴

くのは、ジェンダーの視点であろう。

戦前『野球界』の編集長を務めた池田恒雄によって恒文社から1946年4月に創刊された『ベースボール・マガジン』では、「少年たちが新しい日本を建設するための活力を養うための野球」と、野球をする男子に国家復興の期待をかけ、野球を通じて「精神と身体力」を付けることを求める。スポーツ雑誌ではスポーツという名の下に「力」が強調され、武道と同様に内在するであろう「闘争心」の危険性はフェアプレーという民主主義精神によって隠蔽されてしまう。

そして「少年と野球」に華々しい脚光を浴びせる出来事が起こる。1946年8月の甲子園復活である。開会式を報ずる『朝日新聞』は、「二百七十名の健児は感激にふるひ烈々の闘魂を漂よはす、午前八時半野球大会行進曲のリズムに乗って役員、全選手が一糸乱れず入場してくる……」と報ずる。それはつい一年前までの特攻隊や少年兵の行進と姿を重ねる。

1947年に入ると、戦前に『少年倶楽部』の編集長であり、戦後公職追放により講談社を去った加藤謙一によって『野球少年』が発刊される¹²⁾。創刊号には、「スポーツこそは、新しい日本を再建する原動力です」と書かれる。その目次は、戦前の『少年倶楽部』を思わせる。熱血小説「虹を射る少年」富田常雄、野球小説「櫻光と共に」山岡荘八、海洋冒険「南水洋の一番鉤」、痛快探検「大密林の獣王」南洋一郎と小説が並び、主人公が軍国少年から野球選手に、軍人が野球選手に、軍神が野球指導者に代わっている。写真口絵には「皇太子殿下の野球」「痛快!!本塁打」「球の投げ方写真コーチ」「世界の本塁打王」、飛田穂州「野球礼讃」小川正太郎「野球上達誌上コーチ」三原修「六大学リーグ戦予想」宇野庄治「日本野球リーグ戦予想」、その他には飛田穂州「早慶戦と獐猛神吉」やサトウ・ハチロー作詞の「野球の歌」などがある。特別附録は最新六大学野球選手一覧表・最新日本野球選手一覧表となっている。そして飛田の「野球礼賛」は、「少年は国の宝である」と始まり、「球に魂を打込み、快打に心を洗ふならば、吾等の云ふ野球道は、^{やが}聴て少年の心に男の進むべき道^{おし}を訓へ、^{てんび}天日楽しむべきを知らしめる」と締めくくられる。「男の進むべき道」ということばが、明確に野球と「男らしさ」を繋ぐ。そんな飛田が創刊号に2本の記事を寄せている。

1947年6月の『少女クラブ』が戦後初めて取り上げたスポーツは、ドレスのような衣装を纏ったフィギュアスケートを

する少女の絵図であった¹³。以降1949年に、女子スポーツ写真特集があり、バレーボール・バスケット・テニス・陸上競技などが取り上げられるが、「野球と少年」のように、精神論と合体してスポーツに意義を見出すような記事は見当たらない。「女子のスポーツ」が「男子のスポーツ」という砦の構築に貢献する。

この1947年に復刊された『野球ファン』（野球ファン社）には、キリスト教的人道主義から社会主義を唱え、早稲田大学野球部の創設者でもある安部磯雄が「復刊の辞」を寄せる¹⁴。

昨年来「プロ野球」「社会人野球」が恰も奔流の激する勢を以て活気を呈し人気を喚んで来た。…日本が平和な民主国家に生れ変つて再び国際社会に仲間入りする為には何よりもまづ国民が明朗闊達なスポーツ精神、フェアプレイ精神に徹し、而して所謂真の紳士道を体得することに努めなければならぬ。

「平和な民主国家」として国際社会に仲間入りをするために、野球のスポーツ精神から「紳士道」を体得する必要性を説く。「紳士道」という「男らしさ」の再定義によって、敗者の男からの脱却を目指している。

1948年新年号（1947年12月発行）の『野球少年』の表紙は、トロフィーを手にした野球選手が飾る。「少年」の前に映されるのは「戦う男」である。この号では、医学博士が「野球できたえたからだ心とを、社会のために役立ててこそ意味があるのだ。われわれの愛する野球が健全に発達するもしないも、この心がけのあるなしに関係が深いのである」（13頁）と自身の野球部時代を回想し、説く。ここでも「少年」は「鍛える」ことを求められる。野球をする「少年」、野球で鍛えられた「少年」が社会でも有益な人材となる — こうした博士という肩書を背負った言説は確実に「少年」、そして「男性」を野球という一つのスポーツを通して序列化していく。鍛えていない「少年」は弱くて価値が低いのである。「愛読者のおたより」という投稿欄にも「ベースボールによって得られる肉体的・精神的効果が日本の再建に有益である」と綴られる。

1948年の『野球少年』新年特別号（2月発行）では、大人の野球選手が憧れの対象として並ぶ。戦時には軍人が、占領下の国の再建時には野球選手が「お国のため」を担う。

同号「真に野球を愛する少年」で飛田は、素手で血だらけになりながらも投球を続けた少年を模範として提示する。

今の少年諸君に、こんな正しい野球愛と、勇気と、忍耐と、努力と、そして熱意があらましようか。……ただの球あそびの野球をやめて、正しい野球を考える、どこにも曲がったところのないまんまるなボール、これは少年諸君のたましいと同じような清らかさを思わせませう。野球をやるなら心の美しい野球をやりたいものではありませんか（20-21頁）。

あの少年軍人がどこまでも清く、まっすぐに描写されたように、少年・学生野球を飛田は限りなく美化し、野球の価値を高めてゆく。この野球は菊幸一が指摘した一高野球とその姿を重ねる。今、飛田は軍神の位置に在る。

戦前、戦地の兄を思う詩を書き続けたサトウ・ハチローは、『野球少年』3巻8号（1949年8月）で戦場を甲子園に置き換える。その詩に添えられた斎藤五百枝の挿絵は、陸軍幼年学校の整列と変わるところはない。かつて戦時に飛田は軍隊・戦場と野球・グラウンドを重ね合わせていた。飛田にとって野球場は戦場であった²²）。

一昨年の大会に彼らの少年軍が魂の一球に覇権を目ざしつある頭上に、軍務公用の厳肅なアナウンスをきいて襟を正し、まさに勇躍征途に向かうべく立ち上がった勇士を歓送した。（43頁）

一年櫛風沐雨の練習に男子の心血をそそぎ、死力の戦闘にあえなく散りは散っても、…（46頁）

前線があつて銃後があり、銃後があつて前線がある。代表選手は前線であり、背後の学生は銃後である。対校試合は国家戦争の縮図とみなしていこうさしつかえない。（120頁）

飛田の熱い思いが、敗戦と同時にフェアプレーと民主主義を象徴した野球へと変貌したとは考えられない。

その他の記事でもアマチュアであろうと、プロ選手であろうと、「たくましく」「不屈の」「正しい」野球選手というモデルが提示される。飛田もプロ野球の三原も野球選手の強さと正しさを尊び、そこにアマチュアと興行という対立する野球観の矛盾は解消される。野球選手と男の肉体的逞しさがかつての軍人のごとくに偶像化される。それらの言葉も

肉体も、軍人に幾重にも幾重にも重ねられたものであった。かつて「男性のモデル」であった若き軍人に、高学歴あるいはプロの野球選手が取って代わるという交代劇を少年野球雑誌は見せたのである。

3. 「大和魂」とホモ・ソーシャル

本節では、GHQと野球、GHQの日系二世の心理、そして彼らと野球に懸けた男のホモ・ソーシャルな連帯へと視点を移したい。

正力松太郎が巣鴨から出所して約半年後の1948年4月、鈴木惣太郎はGHQキャビー原田(原田恒男)と再会する。1921年カリフォルニア州に生まれた原田は、1941年にアメリカ陸軍に志願した。かつて鈴木惣太郎は1936(昭和11)年第2回アメリカ遠征で、カリフォルニア州サンタマリアでノンプロのサンタマリア・インディアンズでプレーする15歳の原田を日本のジャイアンツに誘っていた経緯がある。今、原田は経済科学局(ESS)局長マークットの腹心であり、大きな影響力を持っていた。鈴木惣太郎が原田を訪問し、後楽園球場の接収解除を頼んだとき、「原田(その自叙伝『太平洋のかけ橋』において、原田は自身を三人称で呼んでいる)は日本の野球を愛する鈴木惣太郎の熱情をひしひしと感じた。野球の復活が日本の復活につながることも、原田にはよくわかっていた[()筆者補足]」という²³⁾「日本の復活」、それは占領者Cappy Haradaではなく、原田恒男の願い、戦時の日本兵の姿に見た勇敢な「日本男児」の復活ではなかったか。

「日本兵は1対1ならアメリカ兵より強い」と思った。自分にも彼らと同じ「大和魂」があるので、恐ろしくても、いつもみんなの先頭に立って行動できるのだらうと、日本人の血が流れているのを誇りに感じたりした²⁴⁾。(43頁)

原田に「日本人としての誇り」が垣間見える。敗北の日本人ではなく、野球をする日本人にこの姿を見出そうとしたのであろう。原田が登場したのは、正力コミッショナー実現が着々と進められつつある時期であった。プロ野球復活に賭ける鈴木龍二、鈴木惣太郎とともに、プロ野球復活に自身の

復活も重ねあわせていた正力を中心にしたプロ野球の同心円に、原田も引き寄せられ、男の連帯が形成されてゆく。

マークット少将は、鈴木惣太郎監修『野球時代』(1948年4月創刊号)に1948年2月15日付けで以下のメッセージを載せている。

日本野球連盟副会長

“野球時代”主事 鈴木惣太郎殿

これは、余の確信するところであるが…アマチュアといわず、またプロフェッショナルズといわず、組織ある運動競技の活躍は、個人並に国民に、純清なる競争、相互の理解、競つて而も規則を破らず…などに就ての鑑識を啓発する上に、実に有効適切な感化力を持つものであります。

U.S.A. 陸軍少将 W・F・マーケットより

かつての軍国主義の払拭、フェアプレーのスポーツ振興による民主化、親米、スポーツによる思想的なものからの隔絶といったGHQの意図が映る。GHQは野球に親米・民主化を期待した。だが一方で、野球復活に奔走していた日本人のなかには、野球に「対等な関係」を見出したいという願望、「日本男児の男らしさ」の復活への期待、あるいは仇討という反米意識までもが交錯していたのである。

1949年10月、サンフランシスコ・シールズとの親善試合を原田は回想する。

「日の丸」が「君が代」の音に乗ってスルスルとあがり切るまで、原田は挙手をして最敬礼の姿勢をとりつづけた。「日の丸」がひるがえるのをじっと注目しながら原田は、「オレには日本人の血が流れているんだ」と心の中で叫んだ(90頁)²⁵⁾。

これが戦後間もなく野球復活を実現させる原動力となったGHQ原田の想いである。この原田は日本人としての外見を持ちながら、アメリカ陸軍兵として戦い、今占領者アメリカ人として日本人の前にある。そして心底に「日本男児」の復権を願うのである。原田に人種と「大和魂」というジェンダーの交錯が映る。

一方で、女性と野球もけっして無縁ではなかった。1946年にGHQの女性解放政策の一環として、ソフトボールの

講習会・試合が行われていた。翌年には女子野球(軟式)も登場するが、「多くの雑誌記事も、女子選手のお尻を強調したり化粧風景をとらえたり、あるいはおしゃべりのやかましさを涙の場面を取り上げ、女らしさと野球という配合の妙を好奇の目で書き立てた」という²⁶⁾。また観客のほとんどを男性が占め、入団テストに「容姿端麗」「独身美女」が掲げられなど、「見世物」的であったことがあきらかにされている²⁷⁾。高尚であるはずの野球は、女性によって見世物に貶められてしまう。日本人男性の「男らしさ」の復権を担った野球は、当然「男のモノ」でなければならなかった。選手、コーチ、監督、コミッショナー、興行主など、全ては男性が占める。野球はあくまでも国家の再建を担う男の「神聖」なスポーツとされたのである。

アメリカの野球に戦前から憧れ、野球の親善試合によって親米感情を育み対等な関係を築こうとする者があった。日本野球の精神主義を論じ、日本人男性の「男らしさ」を信じる男がいた。野球に富と権力の獲得を期待するものがあつた。日本人男性の誇りを取り戻そうとした日系アメリカ人がいた。野球に結束したさまざまな思いの交錯である。その多くが野球経験者であり、野球によって男子の序列の上位に位置し、自己顕示欲と自信を有した男たちであった。加えて、高学歴と英語力に長けた男たちが野球を媒体として再びヘゲモニックな「男性性」を再定義し、そこには「男文化」が育まれていったのである。

歴史学・政治学者である波多野勝は、昨年『日米野球の架け橋 一鈴木惣太郎の人生と正力松太郎』を著した²⁸⁾。とりわけ鈴木惣太郎に関わる精微な史料は見事である。だが、描かれたのはまたしても、「男」たちの「力」の抗争ではないか。「男」が喜ぶ、「男」のストーリーの枚挙に遑がない。まさに男が作った歴史・文化において、野球は核心的な役割を担ったという。

おわりに

「瀬戸内少年野球団」も描き切ったように、戦後の野球は、希望・夢・健全・娯楽を、打ちのめされた敗戦国の民に与えたと、よく言われる。しかし、それだけではなく、そこに日本人男性の「男らしさ」の復権を見出すというのが、小論の試みであった。「軍人として国家のために死ぬ」という「男

の証」「弱くない証」、そして拠り所である「強い国家」は消失し、「男らしさ」「男の連帯と優越」は脅かされた。そこに、「男性性」の再定義装置が必要とされたのである。

そして、敗戦の翌日から野球を渴望して男たちは動いたのである。それらは占領下に「男としての支えを失った」日本の男たちが、戦勝国の対立の中で、無力な「女・子ども」であってはならないと、「男らしさの復権」を急いだことを如実に示していよう。ウィークネス・フォビアの崖っぷちから落とされた「男」たちは、一刻も早く這い上がらなければならなかった。そこに野球というスポーツが求心力を有したのである。

さらに、戦後の占領下にメディアの野球に注目した。男性モデルとして軍人と野球選手の交代劇を見せた『少年クラブ』、『野球少年』などの野球専門雑誌の発刊、少年雑誌における飛田穂州の再登場や甲子園の美化と熱い声援がそれを物語る。加えて教育は、野球に「健全なスポーツ」というお墨付きを与えた。

野球が選ばれた理由を、GHQの支援だけでは求められない。そもそもアメリカで「男らしさ」を象徴し、男たちによってプレーされてきた闘争的・競争的スポーツであり、そしてチームスポーツのなかでも、一人一人の出番が用意され、その力量が露呈する野球は、十分に「強弱」と「優劣」を判定し、ウィークネス・フォビアを刷り込む装置としての機能を果たしうるものであつた。それは「男らしさ」「男の連帯」がつねに測定装置がなければ成立しえないこと、さらに男たちがつねにその装置を求めることを示していないだろうか。構築を暴露するこの装置による男の差異化が、再び「弱」を嫌悪し、排除するフォビアを生む。

一方、学生野球憲章の条文から「日本人として」という文言が消えたのが1978年、在日外国人学校の高校野球参加が1991年という事実が示すように、国内の外国人やマイノリティも排除されてきた歴史が物語るのは、戦後に始まった野球熱が日本人男性の「男らしさ」の再定義を担っていたからに他ならないであろう。

声高に叫ばれた「日本の再建」とは、少女・女性、非日本人、貧者、軟弱な男たちを再び排除した「男の再建」に他ならなかったのではないか。弱の領域からの脱却を野球によって試みたのではないか。男を競わせるモノ、男を優越させるモノ、男を連帯させるモノが再び期待され、「男文化」形成に加担していく。野球を円心にした、資本主義、精神主義、権力志向、国家国民意識などさまざまな「男文化」を象徴的に見せたのが戦後の野球でえある。「男文

化」が推進した原発開発が、現代に大きな問題を投げかけていることが示すように、「男文化」の検証は「今」の課題なのである。

註

1. 阿久悠 1979『瀬戸内少年野球団』文藝春秋。1984年6月、篠田正浩監督により映画化。
2. 内田雅克 2010『大日本帝国の「少年」と「男性性」— 少年少女雑誌に見るウィークネス・フォビア』明石書店。
3. 中村哲也 2007「日本学生野球協会の成立と「学生野球基準要綱」の制定：学生スポーツの理念における商業主義と教育」『一橋大学スポーツ研究』26: 25-32、中村哲也 2005「戦後日本における学生野球の制度とその理念—飛田穂州と関連して」『スポーツ史研究』(18)、後藤太之 2002「飛田穂州の野球観に関する研究」『明石工業高等専門学校研究紀要』(45)、高橋豪仁 2002「飛田穂州の野球理念と物語の生成」『奈良教育大学紀要』51(1)など。
4. 伊藤公雄 2009 We, Japanese, gotta have WA? —日本のスポーツ文化と「集団主義」『スポーツ社会学研究』17(1)、伊藤公雄 2008「戦後少年マンガのなかの「敵」イメージをめぐって」伊藤公雄編『ビジュアル文化シリーズ』マンガのなかの〈他者〉臨川書店、伊藤公雄 2004「戦後男の子文化のなかの「戦争」」中久郎編『戦後日本のなかの「戦争」』世界思想社、伊藤公雄 1998「〈男らしさ〉と近代スポーツ—ジェンダーの視点から—」日本スポーツ社会学会編『変容する現代社会とスポーツ』世界思想社、関口久志 2009「男性性と暴力」頻発する(体育会系)サークル男子学生の性暴力の背景をさぐる『教育』59(12) 吉川康夫 2004「スポーツと男らしさ」飯田貴子・井谷恵子編『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店、飯田貴子 2004「スポーツのジェンダー構造を読む」飯田貴子・井谷恵子編『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店、笹沼朋子 2005「スポーツとジェンダー—女性は何のために運動するのか」『日本労働研究雑誌』No.537、江刺正吾 1994「甲子園とジェンダー」江刺正吾・小椋博編『高校野球の社会学—甲子園を読む—』世界思想社、小椋博 1994「甲子園と「日本人」の再生産」江刺正吾・小椋博編『高校野球の社会学—甲子園を読む—』世界思想社など。
5. 1941年、全国中等学校優勝野球大会中止。1943年、学生野球中止。1944年、職業野球中止。
6. 戦前の「少年倶楽部」などに登場する「偉大な軍人」の伝記には、少年時代の軟弱さを克服した例が多く登場する。
7. 1945年11月6日朝日新聞「声」。
8. 『少年倶楽部』は大日本雄弁会講談社より1914年11月に創刊され、1946年4月以降『少年クラブ』に変わり、1962年12月まで発行された。発行部数は昭和初期に70万部を超えたという記

録がある。

9. 「終戦に伴う体錬科教授要項(目)取扱に関する件」および「武道ノ取扱ニ関スル件」(昭和二〇年一一月六日、発体八〇号)により、正科さらに課外活動での武道(剣道・柔道・薙刀・弓道)が禁止された。
10. 『学校体育指導要綱』昭和二十二年度 文部省。
11. 高田通 1947「新しい小学校の体育」体育日本社発行、1996『戦後体育基本資料集』第21巻所収。
12. 尚文館より1947年4月創刊、1961年まで続く。創刊号が4万部、1949年末発売号は40万部を超えたという記録がある。野球と少年雑誌についての考察は以下を参照。内田雅克 2012「少年雑誌が見せた「軍人的男性性」の復活—占領下のマスキュリニティーズ」『ジェンダー史学』第8号。
13. 大日本雄弁会講談社より1923年1月に創刊、1946年4月以降『少女クラブ』に変わり、1962年12月まで発行された。
14. 『野球ファン』1947年5月1日発行、野球ファン社、大和塾衛編集・発行。

【引用文献】

- 1) 千葉慶 2009「日米安保体制と裕次郎映画—戦後日本映画における「植民地的主体」意識の臨界点をめぐって」『日本研究』39。
- 2) 酒井晃 2009「戦後初期日本における男性性の「再構築」—男性の主体化と「男女平等」」『文学研究論集』31。
- 3) 菊幸一 1993「近代プロスポーツ」の歴史社会学—日本プロ野球の成立を中心に—不味堂出版。
- 4) ホワイティング、ロバート 1977『菊とバット』鈴木武樹訳 サイマル出版会。
- 5) 佐伯達夫 1980『佐伯達夫自伝』ベースボール・マガジン社、13頁。
- 6) 同上 111-113頁。
- 7) 鈴木惣太郎 1976『日本プロ野球外史—巨人軍誕生の軌跡—』ベースボール・マガジン社、107頁。
- 8) 長尾和郎 1982『正力松太郎の昭和史』実業之日本社。
- 9) 相田暢一 1987『あゝ安部球場 紺碧の空に消ゆ』ベースボール・マガジン社、129頁。
- 10) 鈴木龍二 1980『鈴木龍二回顧録』ベースボール・マガジン社、211頁。
- 11) 佐藤正晴 2005「占領期GHQの対日政策と日本の娯楽」『明治学院大学社会学部附属研究所年報』35号。
- 12) 谷川建司 2003「占領期の対日スポーツ政策—ベースボールとコカ・コーラを巡って—」20世紀メディア研究所10。
- 13) 米沢嘉博 2002『戦後野球マンガ史 手塚治虫のいない風景』平凡社新書、19頁。
- 14) 飛田穂洲 1927『野球生活の思い出』朝日新聞社、『飛田穂洲選集』ベースボール・マガジン社、第一巻所収、35頁。
- 15) 飛田穂洲 1931『野球・人・漫筆』人文書房、『飛田穂洲選集』ベースボール・マガジン社、第五巻所収、223-224頁。

-
- 16)前掲1)。
- 17)飛田穂洲 1925『穂洲庵独語』、『飛田穂洲選集』ベースボール・マガジン社、第五卷所収、233-244頁。
- 18)飛田穂洲 1939『戦場と球場』、『飛田穂洲選集』ベースボール・マガジン社、第三卷所収、120-124頁。
- 19)有山輝雄 2002『戦後甲子園野球大会の「復活」』津金澤聰廣編『戦後日本のメディア・イベント』世界思想社。
- 20)村井実 1979『アメリカ教育使節団報告書』講談社学術文庫、49頁。
- 21)草深直臣 1986『体育・スポーツにとっての戦後』西川長夫・中原章雄編『戦後価値の再検討 講座現代日本社会の構造変化⑥』、92頁。
- 22)飛田穂洲 1940『野球清談』東海出版社、『飛田穂洲選集』ベースボール・マガジン社、第三卷所収。
- 23)原田、キャビー 1980『太平洋のかけ橋 一戦後・野球復活の裏面史』ベースボール・マガジン社、64頁。
- 24)同上 43頁。
- 25)同上 90頁。
- 26)土屋礼子 2002『創刊期のスポーツ紙と野球イベント 一女子プロ野球と映画人野球』津金澤聰廣編『戦後日本のメディア・イベント』世界思想社。
- 27)花谷建次・入口豊・太田順康 1997『女子「野球」に関する史的考察(II) 一日本女子野球史一』『大阪教育大学紀要』第IV部門第45巻第2号、293頁。
- 28)波多野勝 2013『日米野球の架け橋 一鈴木惣太郎の人生と正力松太郎』芙蓉書房。

[参考文献]

- ・赤瀬川原平 2005『コーヒーマ杯三〇円の時代一岩波写真文庫再発見(第5回)日本人はなぜ野球が好きなのか』『世界』岩波書店。
- ・市岡弘成・福永あみ 2009『プロ野球を救った男 キャビー原田』ソフトバンククリエイティブ。
- ・上野千鶴子 2010『女ざらい 一ニッポンのミソジニー』紀伊國屋書店。
- ・内田隆三 2007『ベースボールの夢 一アメリカ人は何を始めたのか』岩波新書。
- ・瓜生吉則 2009『「少年マンガ」の発見』岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編『戦後日本スタディーズ②…60・70年代』。
- ・大田堯 1978『戦後日本教育史』岩波書店。
- ・大塚英志 1991『少女雑誌論』東京書籍。
- ・川島虎雄 1982『日本体育史研究』黎明書房。
- ・菅野真二 2003『ニッポン野球の青春一武士道野球から興奮の早慶戦へ』大修館書店。
- ・坂なつこ 2010『スポーツにおけるジェンダー関係の変化 一アイルランド・ゲーリックゲームス』木本喜美子・貴堂嘉之編『ジェンダーと社会 一男性史・軍隊・セクシュアリティ』旬報社。

-
- ・ダワー、ジョン 2004『敗北を抱きしめて(上)』三浦陽一・高杉忠明訳 岩波書店。
 - ・中川雄介・加藤千香子 2003『『爆弾三勇士』と男性性』細谷実編集・発行『モダン・マスキュリニティーズ』。
 - ・『キネマ旬報』1984『9人の戦士に託した戦後日本の未来 瀬戸内少年野球団』NO.887。

[執筆者]

山口=内田 雅克

YAMAGUCHI=UCHIDA Masakatsu

教養教育センター

Center of Liberal Arts

教授

Professor